

# TEIKOKU DATABANK HISTORICAL MUSEUM Muse

帝国データバンク史料館だより  
[ミュージズ]

2018.9  
Vol.32

Muse  
Talk

ミュージズトーク

石からたどる、  
小豆島・四十六対の狛犬  
島に嫁いだリケジョが、  
石に魅せられて狛犬探究へ  
小豆島狛犬探究会代表 山西輝美さん

日本アーカイブズ学会登録アーキビスト 松崎裕子  
アーカイブズ探訪記 第3回 花王株式会社

《里山の逸品》大山こま、棕櫚たわし、羽越しな布

## 石からたどる、小豆島・四十六対の狛犬 島に嫁いだリケジヨが、石に魅せられて狛犬探究へ 小豆島狛犬探究会代表 山西輝美さん



山西輝美さん

愛知県生まれ、島根大学理学部卒業。1988年小豆島に嫁ぐ。会計事務所勤務を経て2014年に小豆島狛犬探究会を立ち上げる。現在は丸島醤油株式会社に勤務する傍ら、活動を続ける。2017年11月探訪本『小豆島のこまいぬ』上梓。

### 島に産出しない石で つくられた狛犬

小豆島狛犬探究会は、2014（平成26）年に活動をスタート、18名の会員と共に狛犬の探究をしています。

きっかけは12年に小豆島町が開催した「石の文化シンポジウム」です。島に嫁いで二十数年経ち、子育てが一段落したころでした。もともと石好きで大学で地質学を学んでいた私は参加を申し込んだのです。そのときの案内者が、地質工学が専門で香川県全域を讃岐ジオパークにする構想を提唱されている、香川大学の長谷川修一先生でした。シンポジウムで、小豆島は大坂城に石垣の石を運んだ花崗岩の島であり、石工さんたちがたくさんいたことを知りました。翌年からは香川大学の一般公開講座「讃岐ジオサイト探訪」に参加し、月1回、県内各地を見て回っていました。

あるとき、長谷川先生が、小豆島福田地区にある葺田八幡神社の狛犬を見ながら「これは和泉砂岩でできている」と説明されました。福田地区といえば石切丁場のメツカ、当然花崗岩であるべき石造物が、なぜ島では産出しない砂岩なのか？この疑問が狛犬に魅せられる発端でした。まず一番身近な内海八幡神社へ行ってみると



狛犬探究のきっかけとなった狛犬  
（小豆島町・葺田八幡神社）

砂岩の狛犬、次の八幡さんの狛犬もやはり砂岩。島内に6つある八幡神社にある狛犬が全て砂岩ということが分かり、ますます疑問は深まりました。資料を調べると、北前船で運ばれた物のリストに狛犬という記述が見つかりました。さらに調べていくと、狛犬には3つの文化圏があり「江戸」「浪花」「出雲」などの型の違いがあることも分かりました。

もっと知りたいと思い、古い住宅地図を手に積んで島内の神社を調べ、狛犬の有無、材質調べと銘読みを始めました。その



調査の経過は講座で長谷川先生に報告していたのですが、あるとき先生から「山西さん、狒犬のパネル写真展をしてみたら？」と言われたのです。そのときは私ひとりでも何となく調べているだけだったので、全く聞く耳を持っていないくて、先生はいつたい何をおっしゃっているのだろうううしと思えませんでした。

## 意識を変えたある人との出会い

土庄町肥土山にある離宮八幡神社の狒犬を調べたとき、台座に「昭和十一年四月吉日産土講中取次人佐伯宇太治石工前田両助」と刻まれているのが分かりました。前田両助とフルネームだったので、この誰なのかすぐ判明すると思いましたが、それがなかなか見つからなかったのです。そんなとき、前田両助のお孫さんにあたるおばあちゃんがいることを知人が聞いてきてくれたのです。お会いすると、おばあちゃんは若いころに島を離れていて、祖父が彫った狒犬を見たことはないとのことでした。それを聞いて桜の咲く時期に神社にお連れ



講師に招いた藤原好二氏と、岡山研修旅行にて

し対面を果たしました。ものすごく感激され、ご自身のお孫さんたちにもこの話を聞かせてあげられると言ってくれました。

分かったことをお知らせしただけで、こんなに喜んでいただけるのか。私自身、心を動かされました。調査に協力してくれる友人や、地元の情報に語ってくくださる人々がいることにも気がきました。



独自の器具を作り、狒犬の大きさを計測

そこでパネル写真展をして地元の方に見ていただくことを目標に、小豆島狒犬研究会を立ち上げたのです。小豆島町の生涯学習支援事業として認められ、本格的に狒犬調査を開始しました。狒犬を写真に撮り、大きさを測り、寄進年代など刻まれた銘を読み、型を分類して島内の46対の狒犬をデータ化しました。古い江戸時代の年代の分からない狒犬は、浪花狒犬の研究をされている小寺慶昭先生に見極めをしていただきました。

1回目のパネル写真展は、全てが手探り。印刷、パネル作り、会場構成など大変でした。全長8mの狒犬寄進年表も作りました。小学6年の教科書を借りてきて、それを見ながら上段に日本史を書き込み、下段に小豆島の出来事を書き狒犬寄進のある年を色付けして2Lサイズの写

真を付けました。大人にも子どもにも分かりやすく伝えるためでしたが、私たちも年表にして初めて初め地場産業の変遷が分かりました。まさしく、大ど素人集団、狒犬から学ぶです。

昨年は土庄町の富丘八幡神社にある神馬像が、江戸末期の名石工、丹波佐吉の作であることが調査で判明、地元で大きく取り上げられました。まだまだ小豆島の狒犬も分からないことが多く、調べるほどに新しい発見があります。

小豆島狒犬研究会の活動を通して、計4回の「小豆島のこまいぬたちパネル写真展」を開催しました。回を重ねるうちに判明したことや集めた情報は、本にして小豆島町と土庄町の図書館へ納めることが自分たちの務めだという意識もあり、2017(平成29)年に『小豆島のこまいぬ』を出版しました。調べて分かったことをまとめ、形に残し、皆さんへお返しするということは、活動の基本として心掛けてきたつもりです。ここまでできたのは、会員みんなの協力とたくさんの方の島民の方がパネル展に足を運んで応援してくださったおかげです。



パネル写真展の様子

## 石の文化の現状 石材産業の課題

小豆島の狒犬46対を寄進年代順に見ていき、分かったことがあります。江戸時代半ばより爆発的に増えた浪花型の狒犬は、

大阪から船で瀬戸内の島々へ運ばれ、地元有力者とのつながりで寄進され、各地の交易に貢献したこと。明治になるといったん寄進がなくなり、明治後半から昭和初めの時代には、地元石工たちの活躍が見られたこと。次に四国本土の庵治石工作のものが入ってきて、平成には中国産が台頭してきて現在に至っていることです。

小豆島の石の文化のひとつとして狒犬を探究した結果、日本の石材産業の現実が見えてきました。今後は狒犬を通して、地場産業に貢献できればと考えています。

2019年は瀬戸内国際芸術祭の開催年です。「ものづくり」に視線が注がれます。私たちもそれに合わせて、石工職人さんたちの歴史が語れたらと、高松市石の民俗資料館で狒犬パネル写真と資料展の開催を目指しています。

『小豆島のこまいぬ』



# 「社史からアーカイブズへ — 企業文化としてのアーカイブズの構築 —」

花王の企業文化は間違いなくアーカイブズと固く結びついている。

今回は、花王のアーカイブズの元となった社史編纂を踏まえて、同社のアーカイブズの過去、現在、そして未来について、花王ミュージアム・資料室長の加藤玲子さんにお話を伺った。

松崎 裕子 日本アーカイブズ学会登録アーキビスト

## 社史大国日本の中で ひととき輝く花王の社史

日本は「社史大国」と言われるほど社史発行が盛んであると言われてきた。年間200点前後が発行され、明治以来、累計1万6千点を超える(\*)。

社史を刊行したことのある企業の中でも花王はひときわ目立つ存在である。その理由は、1890(明治23)年10月17日の花王石鹼の発売以来50周年に当たる1940(昭和15)年10月13日に、日本で初めてアカデミックな執筆者によって刊行された『初代長瀬富郎伝』と『花王石鹼50年史』が、信用できる社史(かつ石鹼業界史・産業史)として高く評価されたからである。前者は服部之総、後者は小林良正というふたりの学者の手によるものであった。この2冊の製作体制に倣い、60年代以降、経営史学者が編纂事業に関わることによって、企業が発行する社史のクオリティーが向上した。50年史を嚆矢として、花王は70年史を60年、80年史を71年、100年史を93(平成5)年、そして120年史を2012年に刊行してきたように、節目となる周年に継続して社史を発行してきた。

ここで花王の沿革を振り返っておこう。同社は、1863(文久3)年、現在の岐阜県恵那市(当時は美濃国恵那郡



これまでに発行された花王の社史

ある花王株式会社に改称し今日に至っている。

同社は1890年発売の花王石鹼に始まり、花王シャンプー(1932年)、ワンダフル(洗剤、53年)、メリット(ふけ取りシャンプー、70年)、ロリエ(世界初の吸水ポリマー使用の生理用品、78年)、ビオレ洗顔フォーム(80年)、ソフィーナ(化粧品、82年)、バブ(入浴剤、83年)、メリーズ(紙おむつ、84年)、アタック(洗剤、87年)、ヘルシア(飲料、

福岡村)に生まれた創業者・長瀬富郎が87(明治20)年6月19日

に東京・馬喰町で開業した洋小間物商「長瀬商店」を前身とする。

1911年10月7日

に合資会社長瀬商會が設立、25(大正14)年

5月16日には花王石鹼株式会社長瀬商會

となった後、何度かの組織・名称の変更を経て、85(昭和60)年10月

1日に現在の社名で

2003年)など数多くのヒット商品を世に送り出し、それらは我々の生活文化に欠かせないモノとなってきた。現在、花王は100を超える子会社を持つ花王グループとして、3つのコンシューマープロダクツ分野の事業(ビューティーケア、ヒューマンヘルスケア、ファブリック&ホームケア)とケミカル事業の4つの事業分野でビジネスを行っている。約100の国や地域でグローバルに事業展開している。

## 「創業者が残した遺言『正道を歩む』が 経営理念のエッセンス

現在の社名には創業者の名を留めていない。しかし、同社の歴史にとつて創業者の志、創業の精神は決定的に重要である。創業者である初代長瀬富郎は1911(明治44)年10月26日に48年の生涯を閉じた。そのとき残した遺言は次のようなものであった。

人ハ幸運ナラザレバ非常ノ立身ハ至難ト知ルベシ、  
運ハ即チ天祐ナリ、天祐ハ常ニ道ヲ正シテ待ツベシ、  
総テ何事モ順序ヲ誤ルベカラズ

また創業者の後を継いだ二代目長瀬富郎は、次のような言葉を残している。

現在の花王石鹼は果たして大衆の要求に一致して  
真に廉価なりや。

現在の花王石鹼は果たして比類なき優良品にして、  
石鹼として完全無欠なりや。

現在の花王石鹼は果たして新時代の感覚生活に最も  
適合せる内容体裁を有するものなりや。

我等は果たして文化的意義と使命とを胸に感じつ  
つ日々その業務に服しつつありや。

今日の経営法は果たして軌近(ほんきん、最近の意)  
社会の情勢と時代人心の趨勢に合致せりや。

「長瀬商會は何処に往くか」社員諸君に與ふ  
1928(昭和3)年



創業者と二代目のふたりの長瀬富郎が残した経営の理念と方針は、時を経て、90年代半ばにまとめられ95(平成7)年6月に社内配布された「花王の基本理念」、2003年6月に刊行された社内向け書籍「絶えざる革新」、そして04年10月に策定された経営理念「花王ウェイ」The Kao Wayのエッセンスを構成することになる。花王ウェイの基本となる価値観(よきモノづくり、絶えざる革新、正道を歩む)は、同社に残されたアーカイブズ(記録資料)とこれを用いて編纂した社史が時を超えて今日に伝える、花王が最も大切にしている考え方である。

## 未来に向けたESG経営と「正道を歩む」

近年、特に今年に入って花王はESG(環境、社会、ガバナンス)と言われる、企業活動における非財務的要素との関係で大きな注目を集めている。地球環境の保全や持続可能な発展にとって必要とされる、環境への負荷が少ない生産プロセスの導入、サプライチェーンにおける人権の尊重、社内におけるダイバーシティ(多様性)の振興、組織の透明性向上といったESGに関わる事項は、収益拡大の原理によって進められる企業活動にとってはコストとみなされることが多い。花王が注目されているのは、このようなESGを積極的に経営の軸に据える方向を打ち出したことが評価されてESG基準に基づいた投資インデックス(FTSE Blossom Japan Index、MSCIジャパンESGセレクト・リーダーズ指数)に採用されるに至ったためである。

筆者は今年6月に東京都内で開催されたESG関係のシンポジウムに参加し、花王のサステナビリティ担当者のご報告を伺った。同社がESGに対する考え方を「コスト」から「未来への投資」に転換したのは、基本理念である花王ウェイ、「正

道歩む」に基づいている、という説明が大変印象的であった。創業者に遡る経営理念が現在も企業経営の軸として受け継がれているのを強く感じた。

## 社史編纂のための資料コレクションとしての花王アーカイブズ

今回案内していただいた花王のアーカイブズを担当する部署は、コーポレートコミュニケーション部門企業文化情報部花王ミュージアム・資料室である。同社すみだ事業場内にある。同室は、50年史出版準備のため1936(昭和11)年に設置された「50年史編輯室」を前身としている。また、93(平成5)年の100年史の刊行から13年後の2006年10月17日、すみだ事業場内の「花王」清潔と生活「小博物館」(1990年10月開館)をリニューアルする形で、「花王ミュージアム」を開設している(一般公開は2017年1月から)。これは社史編纂を通じて収集した社史資料コレクションとしてのアーカイブズを展示に活かし、経営理念である花王ウェイを従業員、経営者、



初代を含む初期の石鹸が保管されている

取引先、顧客、一般の人々に伝えるツールとしての機能を担っている。

資料室内に所狭しと並ぶ資料は、大半が社史編纂のために収集されてきたと思われる。その内容は多岐にわたっている。空調管理が整備された保存室では、非常に貴重な1890(明治23)年発売の初代花王石鹸や、脱酸処理が施された重要な紙資料類が保管されていた。一般の収蔵スペースにも、かなり古い時期からのさまざまな種類の資料が数多くある。全体からするとごく一部であるが、次のようなものを拝見した。

- キャンペーン資料：新商品の情報をまとめた紙資料である。ファイルボックスで管理され、年代別とブランド別の両方から検索できるようにになっている。
- ある商品がいつごろ発売されたのかを調べられる。

- ラベル：長瀬商店時代の商品に添付されたもの。輸入物を模したものや、純日本風なものなどさまざまなラベルがある。まだ社内にはあまり知られていないという。



「T.NAGASE」(長瀬富郎)の名が入ったラベル

- 新聞広告や新装花王石鹸のパッケージデザインを公募したときの原画。

- 重役会議の記録。

- 昔の年賀状：かなり古びて茶色に変色した台紙に新しいホチキス針で止めてある。

- 120年史作成時のヒアリングの資料：インタビューの録音されたテープ、テープからの書き起こし、さらにインタビュー時に利用したパワーポイント資料(プリントアウトしたもの)他。

- 書籍：ミュージアムの展示で紹介する清浄文化を知るための資料として所蔵している。昔の化粧法やお風呂に関するものも含む。

- 年史類

2015年1月に資料室に異動してきた加藤さんによると、何をひとつの単位として資料を数えるのか、その判断が



スクラップ帳の新聞広告

非常に難しいという。比較的数字や容易なものとしては、自社商品が約1万2千種、他社の昔の商品が約5000点、ポスターが約1500枚、映像や音声のパッケージ(DVD、テープなど)が約3千本ある。映像や音声資料で再生可能なものはデジタル化を進めている。

さらに、スクラップ帳に貼り付けられた新聞広告や雑誌広告の切り抜き、写真や画像、社内報、工場の年報、商品開発の資料、生活コミュニケーションというお客さま関連部署の発行資料、社内会議のパワーポイント資料などが所蔵される。16年の終わりにこれらをきちんとしてデータベースに登録することを決め、17年段階で約1万点の登録が終わった。これが全体の約3分の1程度で、合計約3万〜5万点程度の所蔵資料があると加藤さんは推測している。

## 社史編纂から出発する アーカイブズ

加藤さんは、現在、最も優先順位の高い業務として資料のデータベース化に取り組んでいる。加藤さんのお話の中で、社史編纂によって集まった資料への対応から出発する日本の企業内アーカイブズ部署にはいくつか共通点があると感じた。

第一に、社史編纂の目的は明確で、周年行事のスケジュールに合わせ、会社の歴史を叙述した本を作ること

である。この目的に則して、資料は収集され、執筆のために整理される。資料室には社史執筆者が整理したとされる資料の固まりも存在するが、アーカイブズのデータベースの考え方は違った整理方法ではないかという加藤さんのお話があった。

第二に、デジタル化・ネットワーク化が始まる以前、社史は独立した紙の刊行物として、自社の貴重な歴史情報を収録したレファレンス・ツールであった。アナログ時代は社内外からの問い合わせがあれば社史に記載されている情報を提供して終わるのが当然とされてきたようである。その情報の典拠、つまり社史の記述のエビデンスを管理することに、かつてはこの企業も特段の意識を持っていなかったのではないだろうか。このようなマイナドセットのために、社史刊行後の収集資料の散逸が、日本の企業の場合、デフォルトとも言える状況であったと考えられるし、いまでもその状況は克服されていない。

第三に、日本の組織は、業務に人をつけるのではなく、人に業務を割り振る傾向があることから、業務が属人化しがちである。収集した社内資料を社史刊行後にどのように活用できるのかが未知であった時代には、資料整理・資料台帳作成に人を配置し、コストを掛けることなど想定しなかったのは当然とも言える。

しかしながら、現在はデータベース作成によって、資料整理は格段に容易になった。スプレッドシート形式で資料に関する情報(例えば配架場所、タイトル、作成年代、作成部署といったメタデータ)を登録しておくだけでも、検索の利便性が飛躍的に向上する。さらに資料自体をデジタル化すれば、マルチメディアで社内さまざまな用途(広報、デジタルマーケティング、研修教材、その他多数)に簡単に利用することができる。「取材を受けた広報から画像を欲しいと言われても、探すのに手間がかかります」「どこに何があるかが分かっていないから、資料がたくさんあっても使いこなせていないのがもったいないです」と加藤さんは指摘するが、この問題の解決に向けて、資料室では現在着々とデータベース化が進んでいるのを目の当たりにした。

## 花王のアーカイブズの これから

加藤さんは次のようにも語ってくれた。

いま、私がやろうと思っているのは、資料の所在を理解した上で、過去にあったことを研究し、そこからテーマを決めて情報を発信することです。要は整理して活用する業務です。情報発信によって、社員、あるいはお客さまに花王をもっと知ってもらおうということが任務だと思っています。

花王では数次にわたる過去の社史編纂を通じて、膨大な社内資料の集積Ⅱ宝の山をつくり出した。日本の一般的な企業では、社史編纂後の資料は、そこに含まれるさまざまな価値を考えることもなく、保存スペースにかかるコスト削減のために処分されるか、あるいは散逸してきているのが奇跡である。120年史発行以降は、さらに、会社のグローバル展開に関わる記録も重視し、海外事業所に貴重な資料の管理に取り組むよう呼びかけているという。

データベースの構築にはもうしばらく時間がかかりそうである。しかし、この構築の過程は、「たくさんあっても使いこなせていない」今現在のアーカイブズを使えるように変身させて、花王という会社をさらに多くのステークホルダーに理解してもらおうための、未来への投資に他ならない。

\*社史研究家村橋勝子氏による。

### 松崎裕子

アーカイブズ工原代表。2001年名古屋大学大学院国際開発研究科修士、博士号(術)。2008年より国際アーカイブズ評議会(ICA)レジネス・アーカイブズ部会(CBA)運営委員、2012年より企業史料協議会理事。2017年よりISO(国際標準化機構)TC46(情報とドキュメンテーション)/アーカイブズ/記録管理に関する標準化委員会(SC)委員。





身近な森林として  
人々が手を入れ、共存してきた里山。  
そこには、自然の恵みを活かし、  
循環させていくものづくりが  
いまも生きている。



## 大山こま 神奈川県伊勢原市

落語の演目にもなっている大山詣りは、  
江戸をはじめとする関東一円から  
各地に組織された大山講で旅費を積み立て、  
代参者が行くという形が多かった。  
講を代表してお詣りした者が  
仲間や家族に買う土産品として  
人気があったのが、大山こまである。  
よく回ることから  
「お金の回りが良くなる」と言われ、  
子どもの玩具としてだけでなく、  
縁起物としても喜ばれた。

大山御中途巡ノ鳥居 (伊勢原市提供)

## 棕櫚たわし 和歌山県野上谷地区

かつて海南市東部から  
紀美野町やその周辺地域一帯の山間部には、  
植栽された棕櫚しゅうろが豊かに茂り、  
人々はその棕櫚を使い、縄や網、蓆、たわしなど、  
さまざまな日用品をつくっていた。  
現在の山にその面影はなく、  
放置された棕櫚の木が所々に点在し、  
棕櫚皮を剥ぐ職人もほとんどいない。  
その山をいま、  
往年のような棕櫚山に再生したいと  
奮闘する人々がいる。

野上軽便鉄道 (紀美野町提供)

## 羽越しな布 新潟県村上市・山形県鶴岡市

新潟と山形の県境に連なる山々には、  
小さな集落が点在する。  
そこでは古来より林業や炭焼き、  
狩猟といった山仕事をなりわいとし、  
人々は山の暦に合わせるようにして生きてきた。  
25年ほど前までは、  
冬の交通手段が閉ざされていたという  
過酷な環境と歴史の中、  
山熊田、関川、雷かみづらの3地域では  
奇跡的にしな織りの技術が  
つながれてきたのである。

昔ながらの機織り機でしな布を織る関川の女性 (『ワズワーク』June 1996 Vol.4 山形県提供)





# 美しく、強く。大山木地師のつくる大山こま



むようになったと記載されている。彼らは大山寺のお札やこまといったお土産を持って関東一円を回りながら大山講を組織し、大山詣りの際の宿、食事といった旅の手配を引き受けながらつくったこまを販売していたのである。

伊勢原市教育委員会の歴史文化担当、立花実さんに話を伺った。「大山地区はもともと木工業の盛んな地域で、口ク口を用いて椀や盆などをつくっていました。その中に参詣客向けの土産物があり、こまが代表的な土産物として定着することで、こまづくりが続いてきたのが特徴です」。

神奈川県西部、丹沢山地の東峰である大山は、古来より大山阿夫利神社と大山寺と共に山岳信仰の霊場として崇敬されてきた。『新編相模国風土記稿』によると、中世末期、大山の修験者は北条氏に心寄せる者が多く、豊臣秀吉の小田原攻めの際は武装して小田原方についた。その後徳川家康は、江戸近郊に武力があることに危機感を持ち、改革を実施。下山させられた修験者の多くは御師(おし)や木地師となつて、宿坊と土産物店を営

ちの1人、播磨啓太郎さんは当地の木地師の家に生まれた8代目である。「大山こまはケンカこまといつてぶつけ合いなから遊ぶこまなので、芯棒が太いのが特徴です。また芯棒が抜けないように上が細く下が太くしてあります。この芯棒を通す穴を開ける『芯抜き』は、中心がずれてもいけない、穴を芯棒に合わせないといけない、こまづくりの要です。しかも木の状態などの条件が異なるため一番難しい工程です。人間と同じく、『しんぼう』が肝心です」。

大山詣りが盛んだった江戸時代中期とは違い、レジャーが多様化し、子どもの遊びも様変わりしている中、大山詣りは日本遺産に認定され、いま再び注目されている。「地元にいると当たり前過ぎて価値に気付かないのですが、自然と歴史はお金を出しても買えません。継承していることをありがたく思うとともに、きちんと次の世代につなげていきたいと思っています」(立花さん)



## DATA

伊勢原市は神奈川県ほぼ中央に位置する、都心から約50kmの首都圏ベッドタウンである。市の約3分の1を山林原野が占め、丹沢大山国定公園の一角に位置する大山を有する。





# 棕櫚山を再生し、手仕事にやさしい棕櫚たわしを



は、原料や製品として各地に出荷されてきました。明治時代には、日清戦争や日露戦争で軍需品として多用される。1916(大正5)年には野上軽便鉄道が敷かれ、さらに出荷額が増加した。棕櫚の供給が追いつかなくなって他府県から調達したがそれでも足りず、昭和になって本格的に海外からパーム(やし)を輸入、以降はパームが主流になる。輸入品との価格差もあり、原料としての国産棕櫚の需要はほぼないという現状が続いてきた。西坂さんも「国産棕櫚でたわしをつくっている高田耕造商店さんは、稀なケースです」と言う。

高田さんは「この地で採れた棕櫚を使っただたわしをたくさん売ることが、棕櫚山を再生すること」だと思っていたという。しかし西脇さんに改めて「この先、どうするんや?」と言われ、本当の再生とは?を自分に問い続けた。そして2018(平成30)年の春から、自らも山に入って木の手入れや棕櫚の採取を始めた。「本当の意味での再生はまだまだこれからですが、まずは自分が山に入って棕櫚の木と向かい合うこと。続けていくことで、また『先』が見えてくるような気がします」(高田さん)

高田耕造商店は、海南市で代々続く棕櫚加工品を手掛ける会社である。家業を継ぐために戻ってきた高田大輔さんが、二代目社長である父

和歌山県の地場産業に家庭日用品産業がある。キッチンやバスタイレの水回り商品では全国トップクラスのシェアを誇っている。産業の礎となったのが、野上谷産の棕櫚でたわしや箒をつくる「棕櫚産業」である。

海南特産家庭用品協同組合の西坂公雄専務理事によると「和歌山で産業用に棕櫚が植えられたのは、弘和年間(南北朝時代)だと言われています。江戸時代後期に

と始めた事業が棕櫚山の再生だった。「製品を持って営業に回る中でお客さんに中国産の棕櫚だと話したところ、なぜ国産の棕櫚を使わないのかと言われ、和歌山産の棕櫚でたわしをつくればいいのではないかと、程度の感覚で始めたのです」。かつて棕櫚産業で栄えた地域だったが、高田さんの話には誰もが無理だと言った。そんな中、唯一振り向いてくれた棕櫚繩職人の西脇さんと紀州産の棕櫚たわしを製品化した。



※写真は全て高田耕造商店提供

## DATA

和歌山県の北部にある海南市やその周辺の地域は、熊野古道が南北に通り、古くから交通の要衝であった。東の高野山から紀伊水道に至る長峯山脈が伸びる地形を活かした農産物の他、棕櫚産業をルーツにした家庭日用品の生産者が集積している。



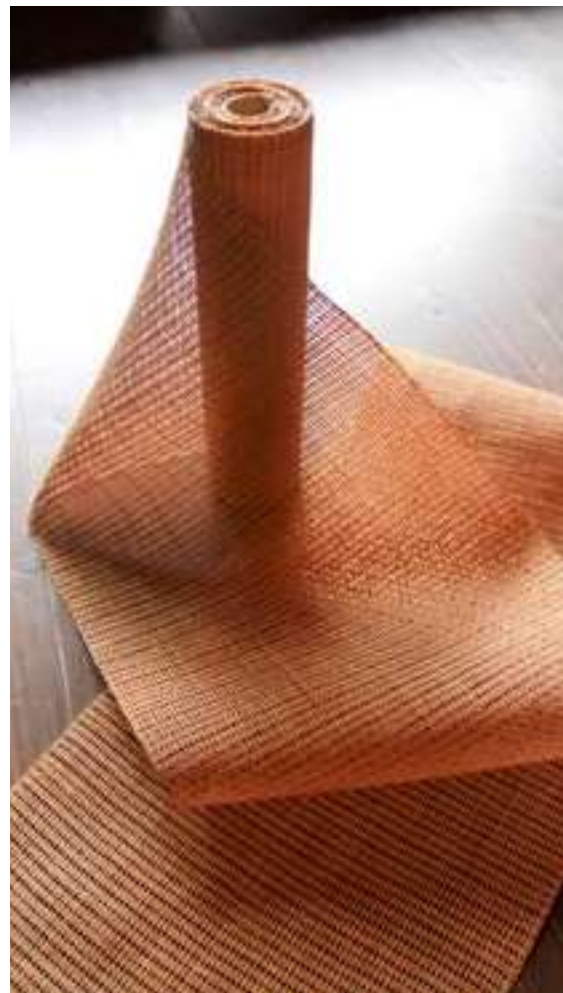


# 千年続くしな布の美と技こそ、山の宝

「手間ひまかけてつくられ、こんなに美しいのに、産地はその良さに気付いていない、買い取る人たちもきちんと評価しない。そんな状況を何とかしたかった」と語るのは、村上市山熊田にある「さんぼく生業の里」企業組合の総支配人、國井千寿子さん。代々受け継がれるしな布と織りの技術を観光資源にしつつ、地域の産業に育て上げた人である。

しな布とはシナノキの樹皮の繊維を糸にして織った織物で、麻布や芭蕉布、葛布、藤布などと共に日本の古代布のひとつである。軽くて強靱な機能を生かして米袋や酒の漉し袋などに活用されていたが、戦後、安価で丈夫な化学繊維が大量生産されると、東北各地にあった産地のほとんどが消滅した。

1960年代、産地として残っていた山熊田、関川、雷を訪れた米沢市の織物商が、生活用の布から工芸品にするべく技術指



導を行った。以来、反物の規格で織って納めるという仕組みができ、技術が途絶えることは免れた。それでも家々が独立した生産者であり、現金収入の足しになればという素朴な思いもあり、織り手の立場は依然として弱いままだった。

山形県鶴岡市にある関川しな織協同組合の組合長、五十嵐茂久さんの話によれば「個人の力では限度があったことと、織り手の高齢化や住宅事情の変化により、各自で機織り機を持つことが難しくなり、そこで集落全戸が出資して協同組合とセンターという拠点をつくりました」。同じ事情を抱えていた山熊田も、しな布に取り組む姿勢に変化が現れた。國井さんは、東京にさえ行ったことのない女性たちを村の外に連れ出し、やがてフランスにも渡った。外部との交流を重ねた結果「私たちも自分で何かやりたい」と女性たちが出資、地元商工会

などの支援も受けながら、國井さんと共にさんぼく生業の里を起したのである。

2005(平成17)年、山熊田、関川、雷の3産地のしな布は「羽越しな布」として経済産業省の伝統的工芸品に指定された。3産地はいま、自分たちで最終製品に加工して販売も手掛ける。市場や時代を見据えるようになり、反物を織って納めていただけのころとは意識も変わったという。山間部で生きるためのなりわいは、里山の大切な逸品となった。

## DATA

奥羽山脈西部日本海側エリアは、豪雪の山岳地帯で知られる。新潟と山形の県境にある山熊田、雷、関川はそれぞれ峠を挟んで隣接する谷あいの集落であり、山仕事を通じた交流が盛んだ。戊辰戦争では3つの集落一帯が戦場となり、甚大な被害を受けた歴史を持つ。



## 産学連携特別企画：日本の会社展 第4回 「地場“讚”業 —伝統と革新の軌跡—」を開催しました。

2018年3月21日から5月20日まで、「産学連携特別企画 日本の会社展第4回 地場“讚”業—伝統と革新の軌跡—」を開催しました。本展では、全国の大学や研究機関で活躍する経済史・経営史・地理学などを専門とする研究者、ゼミナールに所属する学生の方々にご参画いただき、専門的な内容を展示パネルに分かりやすくまとめていただきました。さらに、地場産業を紹介するデジタルパネル、各地の地場産業を日本地図にプロットした全国地場産業地図やデータベースによる展示の他、映像の上映を行いました。本展で取り上げた地場産業は約700に及びます。

会期中は、研究者・学生や地場産業に携わる方はもちろん、ポスターを見て立ち寄った方などさまざまな方面からご来館いただきました。パネルをはじめ展示物を丁寧にご覧になり、半日かけて見学された来館者もいらっしゃいました。



館内に設置したメッセージボードには、見学しての感想を残していただきました。「日本にこれだけ多くの地場産業があることを知らなかった」、「同じ大学生がつくったパネルとは思えない」、「後継者不足や外国製品の影響で衰退していく状況にあっても、存続のため試行錯誤する地場産業に胸を打たれた」、「旅行で産地を訪れるだけではわからないことを知ることができた」、「モノづくりから作り手の生き方や考え方が伝わる」、「地場産業が私たちの暮らしを支えてきたことについて改めて考えた」などは、ほんの一例です。

また、本展については、参加された研究者やゼミナール生の所属する大学等のウェブサイトに掲載していただきました。インスタグラム、ツイッターなどにも感想や会場の写真がアップされました。

ご来館、ご協力いただいた皆さまに対し改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

## 企業史料協議会「第7回ビジネスアーカイブズの日」開催のお知らせ

当館加盟の企業史料協議会は、  
第7回ビジネスアーカイブズの日シンポジウム  
「良きアーキビストとは」を開催いたします。

- 日時：2018年11月5日(月) 13:30～
- 場所：喜山倶楽部(東京都千代田区一ツ橋2-6-2 日本教育会館9階)
- 定員：100名
- お問合せ：企業史料協議会事務局(E-mail: [info@baa.gr.jp](mailto:info@baa.gr.jp))

- 特別講演 朝日新聞GLOBE編集部 高橋 友佳理 記者
- 基調講演 国士舘大学教授・大阪大学名誉教授 阿部 武司 先生
- シンポジウム パネリスト：清水建設株式会社 畑田 尚子 氏

パナソニック株式会社 中野 晶弘 氏  
株式会社虎屋 所 加奈代 氏

総司会：帝国データバンク史料館 橋本 陽(研究員・アーキビスト)

【参加方法等、詳細は企業史料協議会ウェブサイトをご覧ください】



〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町14-3 TEL.03-5919-9600(直通)

ご来館の際は、1F受付にお越しください。

#### ご利用案内

- [入館料] 無料  
[開館時間] 10:00～16:30 (入館は16:00まで)  
[休館日] 土・日・月曜日および祝日、年末年始  
(その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。)

#### 交通のご案内

- [JRご利用] 中央線・総武線 市ヶ谷駅 徒歩8分  
中央線 四ツ谷駅 四ツ谷口から徒歩9分  
[地下鉄ご利用] 南北線・有楽町線 市ヶ谷駅 7番出口から徒歩6分  
都営新宿線 曙橋駅 A4番出口から徒歩9分  
丸ノ内線・南北線 四ツ谷駅 2番出口から徒歩9分

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し越しください。  
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介しています。

[www.tdb-muse.jp](http://www.tdb-muse.jp)